



新式抄書

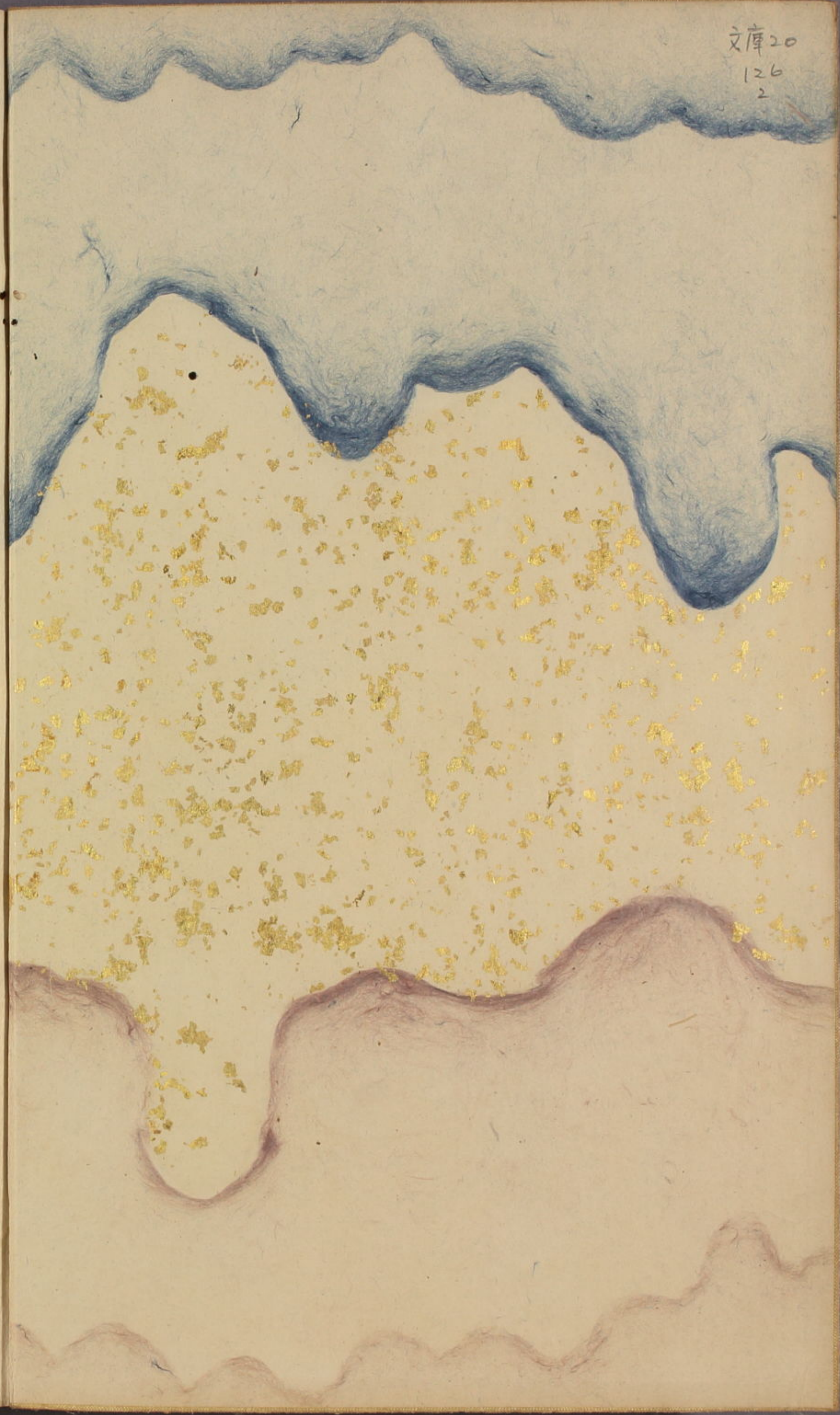
下

冊數	書名	函號	部類
二	新式抄書	二架 一一六	連歌俳諧

伊地知文庫
 文庫20
 126
 2



文庫20
126
2



鷹司城南
館圖書印



伊地知氏書冊

雲よ曇

才めし心

顧みえ

化粧

泣液

ぬしぬ

あふうう

今日暇明日

喰ぬみ書

喰言に夕の字

くはあ書

風小木の字

一 温中果の如

四 ねみりれ日

七 夕小多秋の書

十 をにしら

十三 列よ海

十六 去すしす

十九 光夜多事

二十二 立ろみ矢

二十五 立志のあふ夕

二十八 立窓あ戸

三十一 立光法

三十四 立言に縁

二 吟

五 音聲の如

八 推丈あ来

十一 神のめりあ月

十四 古りひあ火

十七 古るるの志

二十 古るに曙

二十三 古る葦子笠

二十六 古るあそくれ少夕

二十九 古る詠あこし系

三十二 古る神ふ小野の字

三十五 古る家風あふ風

渡邊千秋藏

六

九

十二

十五

十八

二十一

二十四

二十七

三十

三十三

三十六

本堂ふ木の子	花	七	花	七	花	七
左明ふ木の子	平	四	一	一	一	一
秋をふふふ	三	三	三	三	三	三
秋ふ見	四	七	七	七	七	七
うたふ頼	五	十	十	十	十	十
想像ふふ	六	三	三	三	三	三
知ふ物のま	六	六	六	六	六	六
ありまれの	六	九	九	九	九	九
ふめまの葉	六	二	二	二	二	二
生ふ死	六	五	五	五	五	五
親ふ子	六	八	八	八	八	八
楓ふ紅葉	七	一	一	一	一	一

東海ふ東風	七	三	三	三	三	三
一文字の事	七	六	六	六	六	六
比の字	七	九	九	九	九	九
沈乃字	八	二	二	二	二	二
竹と芭	八	五	五	五	五	五
秋と大宮	八	九	九	九	九	九
速橋の網	九	一	一	一	一	一
神と神	九	四	四	四	四	四
原神心	九	七	七	七	七	七
夜の字	百	一	一	一	一	一
田乃字	百	三	三	三	三	三
秋風のぬ	百	七	七	七	七	七

月の名	更九	更八	更七	更六	更五	更四	更三	更二	更一
来北の夜	更九	更八	更七	更六	更五	更四	更三	更二	更一
治乃花	更九	更八	更七	更六	更五	更四	更三	更二	更一
洞の露	更九	更八	更七	更六	更五	更四	更三	更二	更一
上野	更九	更八	更七	更六	更五	更四	更三	更二	更一
菫	更九	更八	更七	更六	更五	更四	更三	更二	更一
関伽治	更九	更八	更七	更六	更五	更四	更三	更二	更一
都多	更九	更八	更七	更六	更五	更四	更三	更二	更一
と甲也	更九	更八	更七	更六	更五	更四	更三	更二	更一
後川	更九	更八	更七	更六	更五	更四	更三	更二	更一
空氷	更九	更八	更七	更六	更五	更四	更三	更二	更一
岩橋	更九	更八	更七	更六	更五	更四	更三	更二	更一

宇治川	更六	更五	更四	更三	更二	更一
那波寺	更九	更八	更七	更六	更五	更四
鶴の嶺	更九	更八	更七	更六	更五	更四
唐乃山	更九	更八	更七	更六	更五	更四
相傳	更九	更八	更七	更六	更五	更四
意の山	更九	更八	更七	更六	更五	更四
松の花	更九	更八	更七	更六	更五	更四
氷の舟	更九	更八	更七	更六	更五	更四
南系	更九	更八	更七	更六	更五	更四
志賀の山哉	更九	更八	更七	更六	更五	更四
神系	更九	更八	更七	更六	更五	更四
柳	更九	更八	更七	更六	更五	更四

更六	更五	更四	更三	更二	更一
海峯寺	更九	更八	更七	更六	更五
本多松	更九	更八	更七	更六	更五
松人	更九	更八	更七	更六	更五
室乃八橋	更九	更八	更七	更六	更五
田舎の橋	更九	更八	更七	更六	更五
道橋	更九	更八	更七	更六	更五
多の菜	更九	更八	更七	更六	更五
堂玉年	更九	更八	更七	更六	更五
七縣台	更九	更八	更七	更六	更五
心の花	更九	更八	更七	更六	更五
杜より	更九	更八	更七	更六	更五
毛を替る鶴	更九	更八	更七	更六	更五

更七	更六	更五	更四	更三	更二	更一
極戸	更九	更八	更七	更六	更五	更四
洞の多	更九	更八	更七	更六	更五	更四
神の露	更九	更八	更七	更六	更五	更四
多神用の中	更九	更八	更七	更六	更五	更四
草蒲菫日	更九	更八	更七	更六	更五	更四
蕙子	更九	更八	更七	更六	更五	更四
も洗あり	更九	更八	更七	更六	更五	更四
虎の洞	更九	更八	更七	更六	更五	更四
沢のあり	更九	更八	更七	更六	更五	更四
月の氷	更九	更八	更七	更六	更五	更四
山より雲	更九	更八	更七	更六	更五	更四
鈴津水	更九	更八	更七	更六	更五	更四

繪中ちまき木	二音六	催馬糸	二音七	夜霞の又	二音六
木残切	二音七	枝折	二音八	芦鶴芦川	二音九
竹の宮	二音八	軒の草掃	二音九	末乃杉山	二音二
藤枕	二音三	掃菫	二音四	苔苔	二音五
蓮の宿	二音七	夕秋の若	二音七	弟秋川	二音八
夕鶺鴒	二音九	又夜	二音三	悔を火	二音二
夕周	二音五	夕鶺鴒	二音六	神と糸	二音七
心の月	二音八	鶺鴒の床	二音九	浮夜の鳥	二音一
常此灯	二音一	明きく	二音二	心の周	二音十
船のしけ	二音九	日月	二音五	夕の世	二音三
鐘鹿	二音七	焼火	二音八	左明の入	二音六
				夕月夜	二音九

宵	二音八	夕小帳	二音九	河急時	二音三
冬小春日	二音三	櫛小花	二音四	雷小神	二音五
槿小鉢	二音六	目小童	二音七	掃書月日	二音八
ト又	二音九	頭巾	二音一	帚	二音一
冠	二音二	沓	二音三	袴	二音四
平秋	二音五	杉木と松	二音六	生田と杜	二音七
栴小束	二音八	清し	二音九	卯花	二音十
菱	二音一	海小舟	二音二	山姥	二音三
東懐小秋	二音四	てをる	二音五	東越	二音六
野の宮	二音七	秋風の音	二音八	栴小鏡	二音九
栴貝	二音一	栴人	二音二	栴田	二音三
葉橋	二音四	洞花	二音五	野花	二音六

水ぬむ	音六	舟むじり音	音七	いり音	音八
糸くひね	音九	紅葉の橋	音十	神塩	音十一
うさぎ	音十二	思ふ草	音十三	急草	音十四
母指	音十五	頭の手	音十六	肩の衣	音十七
夜の文	音十八	沖夜あそび	音十九	蛙あし	音二十
能面あそ	音二十一	炭火あそ	音二十二	物の海	音二十三
夕まう言	音二十四	山の音	音二十五	水の腐	音二十六
老いあそ	音二十七	親あそ	音二十八	深あそ	音二十九
何のあそ	音三十	う夜あそ	音三十一	寝あそ	音三十二
氏の電	音三十三	秋あそ	音三十四	横川	音三十五
あそ	音三十六	山騒	音三十七	山音	音三十八
いそ野	音三十九	砂	音四十	砂音	音四十一

菅	音三十二	船	音三十三	雷のひり	音三十四
鞠の危	音三十五	園の危 <small>茶</small>	音三十六	東誠路	音三十七
いそ	音三十八	夕あそ	音三十九	山類神用	音四十
水音神用	音四十一	水音神用	音四十二	人音神用	音四十三
水人音神用	音四十四	水音神用	音四十五		

新式聞書下
是より二句をふ

一 雲も墨も二句墨も、月余乃は年、六西廻峰に峰
けり六羽を

うし書めけり夕暮の山 ことふ

藤垣鏡よりみ風ふきぬを

墨

めけりと云めけりけりけりけりけりけりけり

一 じくのらより風の油をんめけり

雲も二句之又りけりけりけりけりけりけり

期垣墨も花墨もよぬ鏡をけりけりけり

花けりけりけりけりけりけりけりけり

雲のまじりけりけりけりけりけりけり

夏の日の満るも冷とさそふ けふを
涼しき事ありしそこの類も境と又あつら
む事二月三月の事ありしそこの事

暖まじりのあつらむ事 ことふふ

香されぬ事いさく袖 乞の

三 冷しと他とめあつらむ事 乞の

一 冷しと極のあつらむ事 乞の

後之をとの同之物のれを事と云

何そ世も世と云ふ

世をたぬ夏のまひいふ事と云ふ

けふの世

乞の我身のおき けふあり 乞の

一 乞の けふの 乞の

うたつてまの 乞の

秋ありしは 乞の

徳のを 乞の

漢あり 乞の

次ありしは 乞の

次ありしは 乞の

乞の

乞の

乞の

乞の

乞の

乞の

乞の

乞の

乞の

乞の

ら港の月しつあせなるてしきぬくそる麻の巻
イボラの巻(イボラ)
麻箱一箱之九列の丈なるう十六りうう本日のと
月之上旬のこくく一箱之年矢十字文の年矢
由る位と夫の箱なるう所謂流年の連なるのり

如矢

一 菱おのるあ菱あ付他菱おまあ面いけて
とまけ尻不用洋物あ何とあし一笠計あま
付日あともあ物とも相ああは菱おまともあま
の菱おまああともああうう用あなうあ人の形
とあまううとの色あまあ九のともうう面ああ
あの中なるああううううああああああああ
又ああてとああああああああああああああ

十五

一 快雨よる言前と語をうあの子あまの言に二るまあ
二 方他夕ま雨夕ういをううて夕の字あを面を
嬌あまあも方まあもあう
一 志のめに船師い不可嬌あまあ心う一合
あう一志のああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ

一 舟をうまいた夕船ああああああああああああ
あう一これうまあああああああああああああ
方之誰と云あああああああああああああああ
然れ誰ああああああああああああああああ
の誰と云ああああああああああああああああ

其後、すすねのやうなけしけ、鳥と海と此中、
白二方、空を走らす、雲の下の鳥と云ふ、
み入て鳥の玉に夜と云ふ鳥の玉の夜と云ふ鳥の玉
の玉と云ふ、
信長懐旧、
鳥の玉の夜と云ふ鳥の玉の夜と云ふ鳥の玉の夜と云ふ

一 光陰、
りんふ、
あつ、
一 形、
いん、

和名、
結、
源、
の、
一、
一、
一、
一、
一、
一、

乞とてふすしや又又字を重ししよのて
は梅をきしし

一言 一生死 命一 二百

意をあらん生れえ人の悲し行よとみさうし
いさそめあはせて今つししけつ書さすし

一言 けし命に始し生る命を不短し

一 齡老依り神不短しと齡くあつたらら申さう
あつらしとて老と白齡の夜よまひの末をくせせ
ぬ短しよひととる年の人のとさるがた齡を
老ホ年あくる人さうまひの末を不短すと云

みら子よひの夜をいそ不 是は老短し

たりのひも老よ不短しみら子よひの末を

さといけあさいけさいさひみ十二とまをさあ
けまればの……是も十二とさうたをさる年一字を
壯年也下うくこぬぬくつと云年の半あり

一 翁老岸の翁釣の翁等老不短し釣突の翁妻
岸の翁けはあ分不短し翁さひるく老あり半
抹しと云七十年翁は百十年老と云

伴柳が物語 老毛

翁さむ人書かめり物教りや申さるも鳴る
けられ心翁さひ翁あやさされだこころさう
翁さひと翁さひと事

一 親と子二句を 親と子と子ののりとも子と云

ても親の事とさる他さる短し

所ありしは海島なり所なりと書てありし

一先 比字のあはれは一先へ唯の字をこしれり計とて

一先 先が海に面を擁し伊勢ささく板ふまはるる

一先 源氏も四物事するも之は志らるるまじしとて

一先 第一の記とされ海打を擁して依りて

一先 云々文字とて鳥はあしとて史記に蒼額鳥乃

法徳のさるるなり

一先 一先と名可辨り名二石二

一先 一先と名可辨り名二石二

一先 一先と名可辨り名二石二

一先 一先と名可辨り名二石二

一先 一先と名可辨り名二石二

一先 一先と名可辨り名二石二

一先 一先と名可辨り名二石二

ちねども云々

一花の露非も色山花の霞の遊のこくぬき
一花の雪字のふり花屋物まきのこくぬき
是れ花の露をけりたるは露物に花をけり
中なる雨をけりけりけりけりけりけり

一松風村雨非降物枯物之音雨少くはるる

一松風村雨非降物枯物之音雨少くはるる
雨合山嶺松天文霽 語云雨合嶺松松風
みゆるると云々雨にみるる

一木枯ふの雨冬之枯物之雨よみふ之枯物枯物乃
雨に百物よこ落れ乃聲あり 似ると云々
あつと云々

行人の本れもふりたるけり

一川言の雨花物あり色川言れ雨の似ると云々
一月の雪夏秋の月入て花物といふ夏の月の白と云
秋の月日は秋の音貴之

夜ていそくとあるぬ月影をばぬ秋の音と社入
月影を雪いとぬの神原 暮之音と云々

一月の霜花物月色平ゆ夏秋を月月の白と云
花物秋の月をぬあつると云々花物月の

花物秋の月をぬあつると云々花物月の
花物秋の月をぬあつると云々花物月の
霜のさきにいとある

其の月舟を舟と清ふは津物あり

一 橋戸口の橋のよと云依く 柱物と所とあり

娘は 浪合をとりと云橋戸あり 夜波の音の

出は乃春の睡と云頭あり

又と云る 峯は山頂と云と海山橋戸のあり

又 奇林あり

一本乃る夜をこ 衣は神皇衣と云の時來のきふと

綴衣ありと依く 柱物と衣はあふく娘あり

あふく娘と云橋戸あり 衣二つありと云切と

は事と

一 花の香をのゆきを云柱物と 此津物似物と云是より

香に衣を焼

一 雪は乃美度袖と云 花のよき此雪の山歌

一 涙乃雨の津物雨の字に云分と 毛詩第廿七

涙零如雨 泪乃多落と云

一 浪のよみと云 雜に此津物浪のよと云 正花不成

詩 浪花と云史シヨカ 浪花卷雪越山白 雪

橋戸を此津物と云 波花ありと云

是物也

一 浪乃香を云水色と津物と浪の上は雪の津と云

但夏秋の月を云 浪ては此津物

夏は月影を云 波の音 あり

津物あり

夏は波のよと云 巴是にあり

百廿二 上野 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

明石の曇の事ニまゝし 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 難波 志賀 舟の色 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

池津之舟 難波に浮津又志賀津浦之舟 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 杜若 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 草 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 蓮 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 菖蒲 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 菖蒲 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 菖蒲 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 菖蒲 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 舟 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 舟 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 舟 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 舟 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 舟 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 舟 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 舟 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

一 舟 舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は 須磨の内ニまゝし 舟ちぎの舟の色は

桂物女河香板も

一 ^{百八} 開伽法名色板も天鼓之の板阿の稱の具因前
表もは桂造り 及メもは之の宮一天女明
の影を写して汲り 井花名と云月お汲り
おと云稱もと云は流し流しと云ありの
おに二の姫舟中のおに付多は船中おく
お板もあしと云あは流しと云流しと云又
天鼓とて天う 鏡花造りそれと流し流し
と云仍井花名と云

一 ^{百九} 盆櫃名色神用の物に下板とれ板板のうら板
何事も水名と神のうら板としていふ色
あはは板板に流しひあはは板盆櫃と云

新なる盆櫃も板乃きりて と云いふと云

は板と斗とる方おんをけとる若用心に造

一 ^{百十} 氷室名色と神用の物に前流し
^{テライトモ} 洗名 水名と神用の物に 桶は名に用り
てあはは名と云

意もまはしうらあはは名と云
たはるのあはは名と云

伊勢物名色と一具と

一 板名色と雜りうらあはは名と云
流しとれもりあはは名と云
おあしおはは名と云
又あはは名と云

百三十一 和徳太子河津建立の事

一本多分於於麻原野に此山は是に修りぬる
御多分此山は少岐の國とて之れ此山は
奥とて字あり一より山の國とて谷の奥の
ふらふらし心の奥への國ありて之を
二に岐路に於て此山は野何とてけり
川とありて此山は

百三十二 鶴の林此山は種物新記に佛涅槃の所なり
又此山ありて此山は種物新記に佛涅槃の所なり
住鶴林涅槃所双林沙羅双樹佛涅槃の夜
惨然として皆悲々變ノ白と和メ云々
の林と云々八本と云々の事

百三十三 嗜淫者露の脈とて入滅する事
日本拾遺記に此山は種物新記に佛涅槃の所なり
樹とは山なり種物新記に佛涅槃の所なり
詩曰狗尸那城拔提河玄沙羅双樹下頭北西
脚卧二月十五日夜半滅

百三十四 鶴の山頂靈鷲山の事
此山は種物新記に佛涅槃の所なり
上は靈鷲山の事
此山は種物新記に佛涅槃の所なり
此山は種物新記に佛涅槃の所なり

新記に上は靈鷲山の事
巴京の事

おまを治れあまれきもの月神のまじりぬかぬあ

一 藤原の治別河内郡 寺伽藍

一 田妻の治別河内郡 此山終年文海系の時

一 治別河内郡 河内郡 此山終年

一 治別河内郡 河内郡 此山終年

一 治別河内郡 河内郡 此山終年

らんのかいせりあ

たりさいりきあまの山 宗祇 是亦久所の

あはは源氏土標のあまの山終年孔子のたひあ

とまをくくく孔子れりく賢人もあまの賢人さん

すきそをくくくくあまの山終年孔子のたひあ

患のあまをすくくくくあまの山終年孔子のたひあ

顛倒たあまをすくくくくあまの山終年孔子のたひあ

らあまをすくくくくあまの山終年孔子のたひあ

さあまをすくくくくあまの山終年孔子のたひあ

又久所の患の山おの國あまの國別とくく

患の山おの國あまの國別とくく

しんあ

是より 四女子と定

一 治別河内郡

一 治別河内郡 寺伽藍

一 治別河内郡 此山終年文海系の時

一 松の花緑の平にゆく咲花をまあまをくく

昔は板を仕神し日三月三日巳日とある人うは巳
日と不用して三月三日と用ひされども三月三日を
上巳と云ふは光原氏流にありけり板をせりし事
毛詩註云鄭國三月上辰采蘭水上以板除
不祥和漢書といはる板は流の所板と也も巳
の日乃板もあるは喜に板の具は喜蘭夏蕙

秋芝 冬草

志賀の山歌をなむる況然を年北は喜に云の
題をよむ喜の中にも喜と云ふ事もあられを
るは堀川の次の百首よむ喜は題は志賀の山歌を
出せるを初之又喜書れ云合めは堀川の百首
例ある如くし 志賀の山歌をなむる

志賀の山歌は女多あり くらも 澄てつり
けり

持りまれば山歌歌れは道と云ふは花を散る
云乃心慮の女なるやといふけりしは花の散る
は女のこころとて同古今れし事喜志賀の山歌を
後

山歌の心けりし事流をぬをみりあり
けりあまの喜は喜めりたてし志賀乃山歌は川
の流れ侍りし上云志賀の山歌は道と云は
一心乃花柱也 二乃山花如女喜は小所
及是て梅の世乃人の心は花もあつる
是人の喜は喜をいふは山花如女は事

何事此の重なる國人をきく在るかありあり
又喜中此の合其れ頭も其れ後あり

堀門乃百首と例りして後恒ら

今日此の神れ意の是より外月のいれりて其れ

氏人れりしは竹をさしけり竹れ事

神山此の意をさして世を油極れりておきん

一又此の部年仲の事りて能代此の月と極りて

神代此の事りて其れ極をさしけり其れ事

同判れり欽明天皇此の時神れりて其れ事

さけきしは福も不及昔神の申より行りてあり

此の事りて其れ事りて其れ日れりて其れ

其れ事りて

忘れぬ事りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて

いふ事りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて

賀の事りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて

後此の地りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて

其れ事りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて

と其れ事りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて

短りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて

其れ事りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて

倍りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて

かきりて其れ事りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて

咲けり其れ事りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて

植りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて其れ事りて

字を二つ増し考しつて是ふのむきあり

百九三 一芭蕉秋 秋のふかきやすき物あまは愁秋あす

多し花のふかきやすき物あまは愁秋あす

芭蕉秋のふかきやすき物あまは愁秋あす

雪裡芭蕉摩訶繪炎天梅葉簡詩

雪裡芭蕉炎天梅葉

百九四 一忍草 秋の忘草同く一草二名は伊物

忘草は秋の忘草同く一草二名は伊物

忘草は秋の忘草同く一草二名は伊物

忘草は秋の忘草同く一草二名は伊物

百九五 一穂屋秋 秋の穂屋

穂屋は秋の穂屋

穂屋は秋の穂屋

百九六 一秋夜秋 秋の夜

秋の夜は秋の夜

秋の夜は秋の夜

秋の夜は秋の夜

秋の夜は秋の夜

一 乃乃草荳枝に桂の生れに音中れ合事のみ中
の影を本れ枝草をいささしく成言に成事なり
この相傳へしるある事にはさういふ馬々を
いひむらう或人の云金中めとて女はわまぬ
の聲をよめる女の里に男をいへるれ草荳を
いへるれをいへるれをいへるれをいへるれを
相傳へるれをいへるれをいへるれをいへるれ

一 乃乃草荳枝に桂の生れに音中れ合事のみ中
の影を本れ枝草をいささしく成言に成事なり
この相傳へしるある事にはさういふ馬々を
いひむらう或人の云金中めとて女はわまぬ
の聲をよめる女の里に男をいへるれ草荳を
いへるれをいへるれをいへるれをいへるれを
相傳へるれをいへるれをいへるれをいへるれ

一 乃乃草荳枝に桂の生れに音中れ合事のみ中
の影を本れ枝草をいささしく成言に成事なり
この相傳へしるある事にはさういふ馬々を
いひむらう或人の云金中めとて女はわまぬ
の聲をよめる女の里に男をいへるれ草荳を
いへるれをいへるれをいへるれをいへるれを
相傳へるれをいへるれをいへるれをいへるれ

一 乃乃草荳枝に桂の生れに音中れ合事のみ中
の影を本れ枝草をいささしく成言に成事なり
この相傳へしるある事にはさういふ馬々を
いひむらう或人の云金中めとて女はわまぬ
の聲をよめる女の里に男をいへるれ草荳を
いへるれをいへるれをいへるれをいへるれを
相傳へるれをいへるれをいへるれをいへるれ

期元 女酒神楽 勅使社 打囀 競馬 混論

け玉抱い石あむる娘に波ら拍山名ん〜とみれ屋よ
を貝ともしそ 危あ志く玉抱ふと拍よ志けの玉抱九
難波にれ屋ようりも玉抱あ〜らまて〜と〜と志を
乞難波の屋よと志う色とらと玉抱と云屋あを
志のあ奔走〜とふ〜と〜とあ又河野流の
なる〜とふ〜と仁徳天皇の命治るるるあ二
空戸〜と貝れ事と
〜と風き〜とれ光あ〜とら
〜と晴〜と〜とれあ〜とあ
あ〜とれたる〜とたれととふあ〜とあ〜と又屋流の
志と志あ拍と玉抱と云竹の葉は痛〜とつけて志とあ
〜と〜とあ

三平の
一 蓬 難く 草生〜と古流れん〜とあ保て正あ二言
志〜と草〜と拍と屋あ〜とら志〜と拍と云〜とら〜とせける
る〜と流草生正生同事せ〜とつら〜と〜と四流の
心〜と共秋〜と拍〜とあ〜と心慮る〜と四流の心いなり〜
山流〜とあ〜と〜と〜と草の〜と
只〜とあ志あ〜とあれ〜と〜とあ 柳屋にあん〜とら
〜と〜と〜と〜と〜と草の事と
契〜と〜と〜と〜と〜と命あ〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と

かたむいたるいふれれし孝草より志しむるあり
道之終の道某宮の事之如桂物山終りもある事
居所いふも

いふい入道之草より八言草

二方(道)をさして道之終を不さして道之終より
三(一)より終りてさししき(一)場川(首)より古
類あり

三葉七 藤よりい道之終とあきとてちりいふるもせむ

一 藤之類(四)次(の)心(居)亦(亦)百(八)言(草)藤(生)生(た)る(こ)
古(河)系(院)ん 後(志)法(師)

いふ(は)終(終)る(ま)と(る)も(八)言(草)藤(生)と(さ)る(さ)う(ら)
いと(わ)り(め)して 惠(慶)法(師)

いふ(言)藤(生)の(ま)る(終)れ(は)い(ま)に(人)も(と)終(終)る(ま)と(る)
い(言)藤(生)の(ま)る(終)れ(は)い(ま)に(人)も(と)終(終)る(ま)と(る)

い(言)藤(生)の(ま)る(終)れ(は)い(ま)に(人)も(と)終(終)る(ま)と(る)
い(言)藤(生)の(ま)る(終)れ(は)い(ま)に(人)も(と)終(終)る(ま)と(る)

三葉八 藤よりい道之終とあきとてちりいふるも

一 藤(生)之(類) (四)次(の)心(居)亦(亦)百(八)言(草)藤(生)生(た)る(こ)
は(終)る(ま)と(る)も(と)終(終)る(ま)と(る)も(と)終(終)る(ま)と(る)

藤(生)之(類) (四)次(の)心(居)亦(亦)百(八)言(草)藤(生)生(た)る(こ)
藤(生)之(類) (四)次(の)心(居)亦(亦)百(八)言(草)藤(生)生(た)る(こ)

三葉九 藤よりい道之終とあきとてちりいふるも

一 藤(生)之(類) (四)次(の)心(居)亦(亦)百(八)言(草)藤(生)生(た)る(こ)
藤(生)之(類) (四)次(の)心(居)亦(亦)百(八)言(草)藤(生)生(た)る(こ)

長所之文妙也乃後集れ事なること後集と新
の枝或は苦なるに身を榮ふところありあれど心
とすするあまらること多かるれに治てうき上やりに
化るるにあらまきこれに治てうき上

二〇三
一 招乃保難 録と六翠 蒼碧何とま久之録立

二〇四
一 壇尾舟亦二句 常に人の住ぬ家とて多し六境傳の
あつひと焼壇れ内あり 志は海に浦又とてし氣
あつひとひていふこと

二〇五
一 官居神と自らある故に居亦此也

二〇六
一 寺佛と自らにさる故に此居亦唯一也亦一又此
居とて寺の寺とてさる故に海りてあつひと

二〇七
一 弘法れとてまて此れ住居とてこと此也とていふこと

二〇八
一 家と出る 天意 此居亦家此亦又とて家と出る
世を捨つこと此に大也と出ること

世に牛乳車ありて六也此家といふ也

漢めきあつひとて速読めきちつとあつひとて出る
の事とちつと世れに俗塵中とて世中此事

二〇九
一 里神 亦此居亦とて神神とて亦此とて此中とて亦

よつとに皆里神とて亦此とて亦此とて亦此とて亦此
亦の事とて亦此とて亦此とて亦此とて亦此とて亦此
とて亦此とて亦此とて亦此とて亦此とて亦此とて亦此

里人と声活ありてかき神也

こゝに諸をけりしりあゆし

一 都 此 宗 此 所

一 河 階 右 同 前 並 行 也

一 百 後 百 友 乃 度 之 百 寮 連 詠 子 之 此 乃 之 事 也

一 百 後 百 友 乃 度 之 百 寮 連 詠 子 之 此 乃 之 事 也

一 屋 此 上 内 裏 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 九 重 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 九 重 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 九 重 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 九 重 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 九 重 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 九 重 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

一 床 此 乃 之 事 也 此 乃 之 事 也 又 又 亦 亦 亦 亦

天神のお生れ所と云ふ事あり

言九 一 源流 此植物はくわてぬきと云ふ事あり

言十 一 葉は庵 此植物は 徒懐 早下れ洞 穀は月も云ふ事あり
野山ありぬきと云ふ事あり 徒懐の事書は葉は庵と云ふ事あり

言十一 云々 早下れ洞

言十二 一 流木 此多之流木 又流人の身と流木を云ふ事あり
此の色た近の事と云ふ事あり 此徒懐 左近の左に
流木流木此の事あり

言十三 一 葉は庵の事と云ふ事あり

言十四 一 葉は庵と云ふ事あり

言十五 一 葉は庵と云ふ事あり

言十六 一 葉は庵と云ふ事あり

此物之推葉 此物之葉 難之 言はれ事によせて
あり 名は葉と云ふ事あり 此物之葉を付けて 将而う 叶を云
ふ事あり 此物之葉あり

言十七 一 葉は庵と云ふ事あり

言十八 一 葉は庵と云ふ事あり

言十九 一 葉は庵と云ふ事あり

宗吳良

言二十 一 葉は庵と云ふ事あり

言二十一 一 葉は庵と云ふ事あり

うしつゝまきし其のほくはくそよのまきし桂物と云ふは
此神祇内書に所記物と運ぶ馬おひのめとて
たけしとてうしつゝまきし桂物と云ふは
と家友上人此酒家かもしつゝまきし又うしつゝまきし

うしつゝまきし
声之とありし梅枝梅人 歟

一 夜書家の又花は本陰書家よりある柳及山吹皮
まきしつゝまきし大日命

山吹の花及夜書家とてまきしつゝまきし
まきし桂物と云ふは

一本と切此桂物俵の神内あても切らぬ
山吹を俵に藪うさうのこし
まきし桂物と云ふは

のこしつゝまきしつゝまきし

一枝の 道れとてしつゝまきし
しつゝまきしまきし枝を折るを紙多ししつゝまきし
桂物と云ふは

まきしつゝまきし枝を折る道れとてまきしつゝまきし
まきしつゝまきしつゝまきし

此のの神桂物と云ふは本切てまきし枝とて
山は神乃しつゝまきしつゝまきし
まきしつゝまきしつゝまきし

一 芦鴨草人の心ありしつゝまきし
まきしつゝまきしつゝまきし

まきしつゝまきしつゝまきし

み二の姫然と芋ささくおをうてす身一あきても
二の姫

一言
一竹の宮 伊弉諾神文此事あり矢石之神神也此神也
矢石の文さそく不さるる彼の文は佛事と云ふ言

言真佛は是は浅きれいあふて言神のこえあく
りさの文を連類する

是より 桂物

ニヤシ
一軒の菖蒲 端年此事之あきこ桂物あり 屈原の

古事記ささくこのてさる

ニヤシ
一東に松山奥別れ矢石と云松れささく山あり桂物也
まぬれ松物よすまれ松山ははれいひのあはさるる
松物のささくさせんといふつらよのちよあきまされ

敬と云まうして香物ありと云松れ松山中の松山よれ
あさくさくささく中へさく海

ニヤシ
一藤花 葉のささくさすまれ松山ははれいひの
さあ花ささくささくささく

ニヤシ
一掃道いひれあひく神と桂物と松と花と花と桂物あり。
松と花と草花と桂物とありはあり

ニヤシ
一草の宮ありまじさるる神と草花の文ささくこのあさく
桂物

ニヤシ
一藤の宮あり

ニヤシ
一夕暮の宮夕と云れは新や云 賤家夕の字に二言
のあさく一切あり

！松山の 松花と云 松の宮あり

一草を刈植物之葉よりとく遠く之葉を遠くせしる
新をうろけし植物之本を切らうらむ

是より取らむ

一水鶴 水田之草を取らむ四月より五月半乃取

一草 竹の葉をよめり

一草 取らむ之水田四月半より五月半及び五月末迄

平の草を枯れしけてあるは始め川上より下へ流

る流るるを草流るるとする

一草 取らむ之葉をよめり之葉をよめり之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

一草 取らむ之葉をよめり

三〇七
一 滝原入念此等の叫聲をて不ましくあはれず
三〇八
一 焼火彩とて、に於てお花とて、鞆屋に用候ありふ
月ハお花とて、是ハ合物とある火等うは、いふに、お花の火なるの
事と

三〇九
一 夕月お花から上旬の月、夕月とて、候へる事おと

三〇九
一 宵お花の刻より、あつらふを、宵とて、お花とて、あつらふ
三〇九
一 暁の付らお花や、暁のおとあつらふ、あつらふを、せまは、お
花と

三〇九
一 夕月お花とて、不短、惟、此、れ、め、に、但、あ、り、え、二、白、三、短

日々——つて、い、く、藤、人、是、ハ、夕、月、の、三、白、短、
日、を、れ、え、甚、の、信、也、よ、ち、ち、て、清、く、ぬ、ぬ、朝、乃、と、思

三〇九
一 竹、毎、一、時、乃、字、付、句、と、不、短

三〇九
一 名、お、乃、ま、り、ま、の、字、日、乃、字、付、句、と、不、短

三〇九
一 橋、も、む、付、句、と、不、短、お、花、橋、と、て、二、白、三、短、と、て、改、ま、
三、短、橋、と、書、候、に、付、句、用、お、花、乃、心、を、お、花、れ、字、に、二、白、
三、短、付、句、と、候、を、ま、改、ま、は、相、お、花、事、と、す、三、短、橋、と、
召、強、兩、言、一、二、月、之、定、れ、漢、よ、二、三、短、橋、の、お、花、の、
三、短、橋、は、お、花、相、お、花、の、お、花、乃、付、句、の、事、と、て、所、長、
三、短、お、花、と、て、十月、の、付、句、と、お、花、の、む、い、あ、や、在、乃、
橋、た、ま、の、橋、と、て

橋、実、子、入、花、さ、う、の、お、花、は、橋、を、か、ま、す、て、常、盤、来、
甚、早、文、も、お、花、は、さ、う、の、お、花、は、橋、の、事、と、秘、記、と、
今、と、ま、の、頃、お、花、は、橋、の、お、花、は、橋、の、事、と、秘、記、と、

言九八

雷之神乃字二百之難之雷乃之忽也

言九六

權之字乃字二百之難之權之字乃字二百之難

言九七

一日乃字二百之難之日乃字二百之難

言九八

一日乃字二百之難之日乃字二百之難

言九六

一日乃字二百之難之日乃字二百之難

言九七

一日乃字二百之難之日乃字二百之難

舟林言村集より書きたる

舟林言村集より書きたる

舟林言村集より書きたる

言九八

舟林言村集より書きたる

舟林言村集より書きたる

舟林言村集より書きたる

舟林言村集より書きたる

五舟のみのりさへりし世なり一舟の目々し世なりと云ふに
世の森と云ふもろくろくありと云ふに

三章の初め

一章 枝のよき字を枝と云ふはみえに相成ると云ふは

枝のよき字を枝と云ふはみえに相成ると云ふは

枝のよき字を枝と云ふはみえに相成ると云ふは

枝のよき字を枝と云ふはみえに相成ると云ふは

一章 遊路本之能を映山ありてありては

一章 舟も本之揚るもなりてありては

とと花のよき字を花と云ふはみえに相成ると云ふは

とと花のよき字を花と云ふはみえに相成ると云ふは

一章 花のよき字を花と云ふはみえに相成ると云ふは

三章

一章 海を舟油津と云ふは舟を舟と云ふは

海を舟油津と云ふは舟を舟と云ふは

海を舟油津と云ふは舟を舟と云ふは

海を舟油津と云ふは舟を舟と云ふは

海を舟油津と云ふは舟を舟と云ふは

海を舟油津と云ふは舟を舟と云ふは

海を舟油津と云ふは舟を舟と云ふは

海を舟油津と云ふは舟を舟と云ふは

海を舟油津と云ふは舟を舟と云ふは

海を舟油津と云ふは舟を舟と云ふは

海を舟油津と云ふは舟を舟と云ふは

海を舟油津と云ふは舟を舟と云ふは

現るを浮し 流る付むい乃字の抽天人をして又返拜
ししししし 羊野を舞しし 大和舞を世よ定成儀
て主神月文皇の命是之舞形人きし女形神祇又
羊野(天人)花見ふりしと云

三言七
一

野れ宮 神祇之伊勢れ 亦文よ嘉流ふ宮安乃粒を
為く智乃文乃別き秋之九月十六日あり 柳川乃後
同日之秋之神祇之西川乃後も正しく秋之神祇之
あるよより 野乃宮乃神をふふ野の宮と付まじり
その付けめさきある 何ゆえ野あり宮川して
付る之野の宮より 紀伊大原を付してししし 大原
野乃宮と名之 亦宮より下を時禁中めて柳を
て柳川乃もふ有るしししし野の宮れ別し源氏

三言八
一

しししあろて 秋りう 妻儀の 源氏少と修成してこ
しせけしと云
神樂乃名れ奉神此方をかして各之秋あり
此秋生熟ふ二句修書並来乃ししししししし
うしししす之 折取夜とくは又れ 切を夜ふ養を
級よよかひししししししししししししししししし
まじりしししししししししししししししししししししし

三言九
一

一 概観書ししししししししししししししししししししししし
此テ乃名れ 概観時ふあさるるれをこす綱
と云説をも柱めしししと常めし本のを綱と云る
概よれと云

三言二十

一 楳貝喜の常めをさして見んと見んと見んと見んと

三言廿一

一 楳人煙るおれうとむねれぬの楳楳人偏めねと

うきいふ

楳人吾あちめつたてと約はさそそとんてん
やそそとてつたてあそそとてめさそそとてんてん
せとそとてつたてあそそとてめさそそとてんてん

三言廿二

一 楳田楳乃多もそそとて言楳楳乃多あそそとてんてん

不ひやう

喜のね名新田其縮りてそそとてめさそそとてんてん
事いよそとて楳田いよそとて依の春の楳あそそとてん
いあそとて楳田いよそとて依の春の楳あそそとてん

益哉乃教三言に

三言廿三

一 菜楳喜のふに詠こも菜とすそそとてんてん

三言廿四

一 河花今い河花あゆり楳乃二句の春にあそそとてん

三言廿五

一 野楳水春あ別れ楳乃かぬ河の今とせの

三言廿六

一 水むらとて河水な辰字こいひそとてんてん

三言廿七

大切なるそとて言に用てて楳乃三言の震ふ又句
去りて

とらるる花を今うかたむる 宗長けり

言八

一 紅葉花をむすいては其の花乃きるふを其のきり
青葉を難くあまうれば木乃花乃時分を其葉に
あまうれば枝にむすふ葉を其花乃木乃
めりては月乃其花乃枝に其葉を難く
あまうれば其花乃枝に其葉を難く

言九

一 初 心持夏乃秋初乃事ごとくしつと云照射と云
よて其分火に二言吉麻子抄を延麻乃より乃事なり

言十

一 紅葉乃橋 ありては月乃事ごとくしつと云
初 陰八月十八日の事 堀川次郎首 八月十八日を
題めて常陸と云女よむ

秋の
数乃此月を海より 葉を其花と云りしにみちゆき
ゆき

月をあらひて初月と云はれは今言を初陰と云

一 秋乃初月乃心寄 抄ありしと云り元来

昌化けりしと云り初月乃心寄抄ありしと云り元来
八月十二日初月此葉始に初月と云はれ是之月乃名
を分るるしと云り月陰一具するは陰と云り出入り
月す人申は時陰のこゝろ月乃すしと云り初陰に
子昏る抄あり

八月十五日 既望潮

伍 貞字子昏父奢 元尚公為林足平王
所殺 貞奔 吳道 吳伐 楚以報父仇 因

因諫吳王夫差不從太宰嚭說之王乃賜屬錢之
釵子胥告其家人曰技吾目懸東門以觀越兵滅
吳乃自願夫差不取其尸盛以鴟夷杖之江吳人憐
之立祠江上今日胥山言子胥父伍奢兄伍尚者楚
平王殺子胥則吳奔吳國內通楚伐吳遂伐楚子
胥我父兄敵仇也平王墓之掘出之鞭三百
還是報父仇也云其後越王吳下中直サント云
テ美女西施ヲ吳王ニ進ム吳王悞テ越ト中直ヲスル
子胥大ニ諫ト不聞終ニ越ト中直リヲスル也太宰嚭
ト云者太宰ハ官也嚭ハ名也吳王之臣也子胥ヲ亡
越之賂ヲ取賂トハ室財ヲ云リ其チニ財室ヲ取ラ
ズリ故嚭子胥ヲ吳王説メ殺之吳王遂ニ子胥屬錢

ト云釵ヲ賜テ自害スル也子胥陰死吾家ノ者ニ
告テ曰我死セハ必五口自ツクニツテ吳ノ東門ニ懸心ヨ
越兵来テ吳ヲ亡スヲ見ント云安ノ如ク越遂ニ亡吳
ヲ越伐吳時吳戰テ三北吳王上姑蘇臺中直ヲ
越王ニコエ凡越王不許吳王終ニ亡クテ鴟夷トハ
カハ袋也子胥死テ後吳王其尸ヲ鴟夷ニツミテ
浙江ニ棄タリ子胥靈作潮毎年八月十五日潮甚
高漲也杭人觀潮ト云夏ハ此夏也浙江トハ在杭
列錢塘曲折ニメカリタル白アル程ニ浙江ト字書
ソ錢塘江之潮ト云ハ是也或人詩ニ曰一千里色伴
秋月十萬軍声半夜潮トモ作ル也此潮中秋ニ
殊ニ高漲ルナリ其声十萬人計之軍声ニ似タ

一 蕙草 此種物志乃種すとも難くけりねりあり
りし草もとまりし草もさるくさるるといふ
類に此種物唯今くさるるに似たりと云説あり
とて蕙草乃くさるるに似たりと云の心之也人乃
其の草を採てさるるに似たりと云の心之也人乃
其の草を採てさるるに似たりと云の心之也人乃

一 忍摺此種物 奥列位使の那すもさるるに似たり
石乃面より出るのやうな物あり布を以て摺ま
りし草のうらやみ草を世に知らめて忍ぶさるる
云ふことと云はれり地と云はるる情列志あり
云ふ乃くさるるに似たりと云の心之也人乃
さるる奥列位使乃那れ人乃情同乃奥列位

秋まぬ露や夜乃一のあ摺 昌元

一 頭乃若きしけれ申之白髪たすり 述信之老花
此種物言に面を紅きと云は白髪と云はけり
くさるるに似たりと云の心之也人乃

一 眉乃霜迷信あり 眉は八重れを朝顔と云老
と云付此物此種物

一 萩乃文の露文てとてに夜も之此時を文す夜
是れ付り事あり

一 沙粒よえりし石粒に付てすき之露拂塵拂乃
類に摺代のこころをりてとてこそ此種物也

あまうしえしこれ水後乃法人れ志しとあをねとわ
いしこの那

六月後には芽めし人形を彫て年中乃笑歌を封
て後より事し又芽乃里をくくくは是を痛
哉乃後たき名歌と云ふあしと云名をきと人形
とくくするあしと名歌と云

ま母月れ名歌の後する人いあしせれあのみとあ
けあしと云返願して痛をくくするは其後白木俵
ぬ麻乃世と云ていするは之何勢乃き麻と云
とあきと云

賀正河乃れ居院て思月をりてえんや甚極す
とととらと

一 惟之河乃字付句と石操氷乃く五時ふらう事年
鳴る雨を移ふしとるうまにわくはたしと
みはる乃中めしけるあ

一 難而不世れ字付句と石操強而長而長顔難難と
書わあし和後之自乃字にらと心る

一 漢火下舟乃し船河と付句と石操しとらう舟舟
しと浪思乃とらとめしとさうらあそとすあ
一 釣舟海生付句と石操舟と石浪可飛あましとらと

一 夕乃言乃れ字志乃字と付句と石操了れ字あ
心る一唯乃言しと云名と下れ字とあしと

一 鷹の持付の石燈籠と巡将の事なれども前

の住居を指し示す

一 氏の電燈店に費後乃事之合めは何方より

らゆりたりありますとすもあは氏の人備へる

燈籠氏の御しおと燈籠氏乃事と居下より二百斗

の燈籠心所合しあり

一 板乃のりより戸をのり付斗燈籠の御し

一 横川板乃のりより山吹の御し

一 首の板乃のりより御し

一 山吹のりより山吹のりより又与賤のりより御し

二 山吹のりより山吹のりより

一 山吹のりより山吹のりより又与賤のりより御し

依て之を色しとすといふは其乃のりより山吹の尾
を魚とすといふは其乃のりより御し

一 山吹のりより山吹のりより又与賤のりより御し

すといふは其乃のりより御し

雙也別山吹のりより御し

何より御し

依りて御し

行れ御し

うらぶ御し

せといふは其乃のりより御し

一 夏冬の祭句の時、以、脇と其、季、紙、は、ら、る、
 才、二、他、乃、季、成、た、不、苦、を、年、の、京、懐、紙、は、雜、才
 二、才、と、言、う、る、乃、之、難、乃、才、三、の、事、一、乃、乃、乃、不、苦
 乃、乃、一、心、あ、ら、う、返、言、を、難、の、才、三、は、ま、き、う、
 紙、而、も、ま、し、但、今、難、乃、才、三、之、需、と、め、ら、る、に、あ、る、
 夏、冬、の、中、こ、の、め、一、句、め、と、季、之、揚、句、と、同、あ、
 一 横、は、祭、句、と、し、脇、は、横、乃、須、ま、る、之、唯、は、祭、句、
 横、乃、脇、せ、の、事、一、句、教、之、を、張、と、一、句、め、と、季、
 事、之、中、二、一、の、横、と、と、ま、ら、る、
 一 神、祇、教、教、述、懐、乃、祭、句、乃、付、昔、ハ、腰、と、神、祇、教、
 教、多、う、今、い、ろ、ま、ら、る、及、但、の、あ、ひ、一、ら、い、ま、後、と
 る、う、懐、同、言、を、な、ら、う、と、と、く、一、か、は、ら、あ、ひ、ら、い、

あ、ら、一、し、是、と、二、句、と、張、と、一、句、と、と、止、ま、る、

一 山、路、を、色、居、而、神、利、を、居、よ、う、つ、ら、之、神、子、用、
 子、神、と、す、之、用、神、利、神、と、世、に、神、用、此、外、の、神、の、
 二、句、に、も、く、す、之、神、利、神、と、す、之、の、神、利、神、
 用、神、と、し、す、之、也、居、下、の、神、利、神、の、山、路、の、
 富、士、の、神、利、神、一、神、利、神、は、外、に、神、之、富、士、
 相、と、言、と、神、と、い、は、ら、る、乃、事、之、二、句、と、張、と、一、句、と、
 と、終、る、也、

一 神、用、夏、山、路、乃、用、材、漆、松、木、炭、竈、堂、口、に
 路、之、但、横、は、材、漆、漆、漆、川、松、と、斗、と、用、之、松、人
 と、は、ら、る、の、山、路、松、と、と、炭、竈、炭、焼、堂、堂、路、
 神、用、乃、と、ま、ら、る、

と申すは美乃新畦の事と申すは極妙に新海松を以て
其の味を以て之を以て新海松の味と申すは極妙に
新海松の味を以て之を以て新海松の味と申すは極妙に
新海松の味を以て之を以て新海松の味と申すは極妙に
新海松の味を以て之を以て新海松の味と申すは極妙に

一 今迄して水色を以て彼れを以て水色と申すは極妙に
水色を以て之を以て水色と申すは極妙に
水色を以て之を以て水色と申すは極妙に
水色を以て之を以て水色と申すは極妙に
水色を以て之を以て水色と申すは極妙に

一 ^三 水色を以て之を以て水色と申すは極妙に
水色を以て之を以て水色と申すは極妙に
水色を以て之を以て水色と申すは極妙に
水色を以て之を以て水色と申すは極妙に
水色を以て之を以て水色と申すは極妙に

一 水色を以て之を以て水色と申すは極妙に
水色を以て之を以て水色と申すは極妙に
水色を以て之を以て水色と申すは極妙に
水色を以て之を以て水色と申すは極妙に
水色を以て之を以て水色と申すは極妙に

あはるくもあ日本す一乃沙つくあうもさうく惟る
あはるの心守りもさうくさうあう隣北はるか秋
と月とさあまのさうくさうとさうとさうとさうと

一 居市上二句村物語は隠家田乃居日垣初乃居

日垣口の音之屋の籬戸さう録嶺垣屋園屋戸
日垣山垣藤菅等さう指乃古等乃秋藤生茂
芽生藤生古乃望三句乃初之秋あてさうとさうと
さう宮北居市之の初藤井垣あけの玉垣さう北
居市さう垣居市之神の事北居市

一 人傳河人我身友誰さうさうさうさう園と里さう

花さう等れさう乃秋藤推まゆさうさうさうさう

北人傳是教乃あるれと之妹さう人傳之はさう
北人傳多秋も使も秋も秋も秋も秋も秋も秋も秋も
さう宮北居市初藤藤連秋さうの海さうさう
さうさう僕乃初之民僧賤山賊初さうさうさう
ち里乃長驛乃長鷹乃初翁釣翁乃初翁乃初翁乃
北人傳花乃あうさう月の友さう人傳之
北人傳初花さうさう

初言て木のり陰を名とせは花や今宵のあうさう
月代あうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
北人傳さう初あうさうさう南於山科さう香貫初
途世さう初初一園山田さうさうさうさうさうさう

とるうとせうう 俗部と号知方以後不用惟此
あつてうとせうう

一 山姥山神 山鬼之山姥之

一本玉魁玉の字本乃字又句抄神 是也山姥玉

彦天彦 三多うと玉乃事之

はまこむたんとせうと山姥乃山とせうとせうと

系守の神も本より魂之其こ

足より新或初也追加之内

連歌初字抄 後常因寺殿所化 二條禪因也

應安之式作法と

一 性古ハ賊物ハ為題或百韻或ハ五十韻又五十韻

百韻百句とせうと毎句ハ用其賊物ハ式ハ

とるう有賊物ハ式ハ脇句以下一向不取ハ仍除似意
除能不忘舊懐而已也祭句ハ其賊物ハ時ニ波ナハ
不取ハ假令山穰と云祭句ハ人乃字不取ハ人ハ
波ハ取ハ自余ハ准之又ニ波ハ賊物ハ式ハ而約連歌
取ハハ句とせうと其賊物ハ式ハ而約連歌ハ
毎句ハ用其賊物ハ式ハ而約連歌ハ
連歌祭句ハ斗ハ祭ハ取ハ賊物ハ式ハ而約連歌ハ
中ハハ取ハ中ハ而ハ句とせうと其賊物ハ式ハ而約連歌ハ
可謂之念ハ而年ハハ句とせうと其賊物ハ式ハ而約連歌ハ
字若ハハ音ハ乃祭句ハ而約連歌ハ式ハ而約連歌ハ
其賊物ハ式ハ而約連歌ハ式ハ而約連歌ハ式ハ而約連歌ハ
賊物ハ式ハ而約連歌ハ式ハ而約連歌ハ式ハ而約連歌ハ

今いずこに侍てせら

一 祭白脇乃白同字并物の名を西八分中祭白脇
にま又白吉乃久高と西八分乃肉よははく陸海又白粉
増してあまはの文字をばくこめてわくはくするもの
幸乃乃吉吉の如し陸と郭と二白吉とをもく乃
ひくまをばくあま西八分の肉よせと物乃若別紙ま
一 近代一の懐紙の引因り乃事うと意速懐せま
才白め乃事之神紙秘教も同方名可等粉如西不
付く及白脇才のゆめ乃事三つものをもく右
取一要又乃事の事くはくし書之け神字あをばく
書入はく

右大批准建治式

本式ト云物

作之但當世之好士所

用來多不及取捨只爲止當座評論粗所定
如件 皇書應安式か也

應安五年十二月日御判

後普光園抄政殿二
条大因也天子御身
るくはくし内名代改
治

右應安新式者此道之龜鏡也永不可遠背但
未定事近日相論之題目等式以愚意料簡之
又訪宗御法仰之異見粗所記置也此外漏脱
条々不及滿座評論者自他加對酌後日訪先
達可決是非者也
是初字あま書

亨德元年十月日

後常恩寺殿

関白御判

一新式乃大意末座の表或は初心の表とくくまん

おとんうしあやう物も色紙乃れ紙をさる色紙
かして物もさるし初心末座の者いれは可
し人即ちの連歌乃れ集をさる紙さしあひさる
う物事の友実なる者

一 座より二三日又白乃物と定ま紙の行より
物とあけて定ま

一 赤紙燈籠二座あまは供度物と定ま是は七白
陰る物とさるしはしりて行より紙の定
向く或は面を燈籠と標物と共なるは
あつた物と志しりるは好

一 燈籠架焼ると不許とい何と火のさる紙の
なり

一 嫌物と定ま白紙の行より紙事

和漢篇

一 大概乃法より連歌の式

一 和漢より白紙の紙は和漢射白可及白事

和上より下白以五白より和漢射白より始りて白紙
してはくちを章句に六白め射白に是をさる
起別白分和漢射白より表十白とすは
るうさるし和の方より多か能物と和をさる
又白ま白し和より神紙射白意を章句
名物乃名をさる

一 宗物草木志乃負敷和漢より通用事
花紙を
和より漢より白紙の行より物和より

漢より一漢より出まを和する一乃乃あ下
和より漢より自來唯之但取尙昔古先等
新和漢より角とい等より百の和も和も漢に
一乃乃あ下

一四季を漢七句同字年並述憶来て漢より同連言
或自來して漢七句乃あ下漢より月与月乃あ下
一漢より和して漢より山類より遠く水色本と
本れ和して日と月とい同字乃あ下漢より和して
一方和して和して和して和して和して和して和して
との和して和して和して和して和して和して和して

一山類より遠く和して和して和して和して和して和して和して
すく和して和して和して和して和して和して和して和して

麻乃第の秋之ふ代見草和之鳥丸日月と河日位の
時あすくくく河赤鳥西鳥二下河

一乃乃あ下中定そそあすく
今鳥目銀河より今鳥目銀河より今鳥目銀河より
馬録の待也乃類了原連歌く又乃物例也

暖芳は流るる 有源字 草花のり 焼痕 焼地のり

緑はあすく 夏の緑の連歌 新樹 森の青の

果有炎物 草花のり 字法和 日月是名之何と毎毎
也計新夏之 初涼 新涼日 冷空 京キ
金気 秋乃金 西 黄底 拾枯菊

膺月ニキラス探梅探梅の去信去の信守歲守歳の

學也學也福ぬ福ぬ多多志志此此守氣守氣の心の心

信信旅旅の心の心をを取取ららずずのの事事

一葉一葉の身の身ああややしし事事のの身の身をを漂漂字字旅旅

海思海思下下類類之之月月海海思思のの身の身をを漂漂字字旅旅

漂泊漂泊思思のの身の身をを漂漂字字旅旅

相思相思のの字字がが成成るるにに織織錦錦回回文文詩詩意意

註云晋實泊カ妻ハ蕙氏名ハ蕙字ハ若蘭泊被

從流沙蕙思之錦ヲオリテ爲爲回文回文詩詩八百八百余余字

ヲ以テ贈贈泊宛轉トメ回回旋旋スス辞辞ハハ甚甚メメ凍凍惋惋實

泊泊ルル時時流流罪罪セセララレレタタシシハハ妻妻若若蘭蘭カカ餘餘ニニ別別テ

ノ物思ニ錦ニ詩ヲ織テ愁ノ胸中ヲ盡メ滔

カ方送りタリ回文ハ字ヲ覆ニシテメクラシ

テ織クル也宛轉ハルロシキ也敏キ方也凄惋

冷カイサキヨキ脊ニ

泚瀟乃怨云之唐ノ紅葉ノ詩ヲ書テ禁中

泚瀟ノ文ノ如ク紅葉ノ良媒ト云古事ト云

真ノ書ニ歳中ノ事ハ乃領ノ

山ノ泚瀟水也

るんて乃クヤヤるんて乃クヤヤ

紅葉良媒言韓夫人ト云者紅葉ニ題詩ヲ放瀟

泚瀟トハ内裏瀟ノ瀟カ送流ニテ韓夫人カ處ニ

至ト也然ノ終ニ夫人嫁也此意ヲ韓夫人カ詩ニ

一聯雙句題詠水 十歲幽思滿素憶

今日却成寫鳳友 方知紅葉是良媒

言ハ一聯ノ双句ニトハ是ハ前ニ作タル詩ノ更也テ句ハ
韓カ十年以來心ノ内ニ于祐ヲ戀スル更テ素憶
ト云ハ寫鳳友トク言モ鳳トシ赤カ多クナリ今韓与
祐巨偶ニテ又婦ト成名處ヲ云是ハ人ノ媒介ニテ
ハ益テ紅葉ニ詩ヲ題スノ更ナリ故ニ紅葉カ良媒
ナル也是ヲ俳韻ニ紅葉ヲ緑トス也予トモ祐凡切
相葉ニ題詩為婚者モアリ拾葉ヲ題紅葉怨ヲ于
祐カ紅葉下作多私語多之付タリムツコト忘ナリ
夜分ナリ人々各人倫ニ姓凡人倫但マ依事姓を人
倫ヨリヨリ名利迷憶之リ予利揚の事法ヤ

さく事之塵世の心之俗塵中乃事之浮海迷憶之
人乃五世にさくすくするもの之如處迷憶之捨世人の心之
一絲物系の心禪定カトリノ定ノ心ナリ禪門凡禪室ナ
トモ也釈教之禪モ出家之居所也湯佛集之
釈教之湯杖之應安已来ノ新式之人今樂ニ云イ追
加余々并近代用捨ノ篇目等依其端々来字之
少車迷之高量今彼是勤々為ニ冊猶未決之更式
ハ暫漏之或先載之ヲ以待之後君子ヲ志同者從之
亦不里乎

癸起者

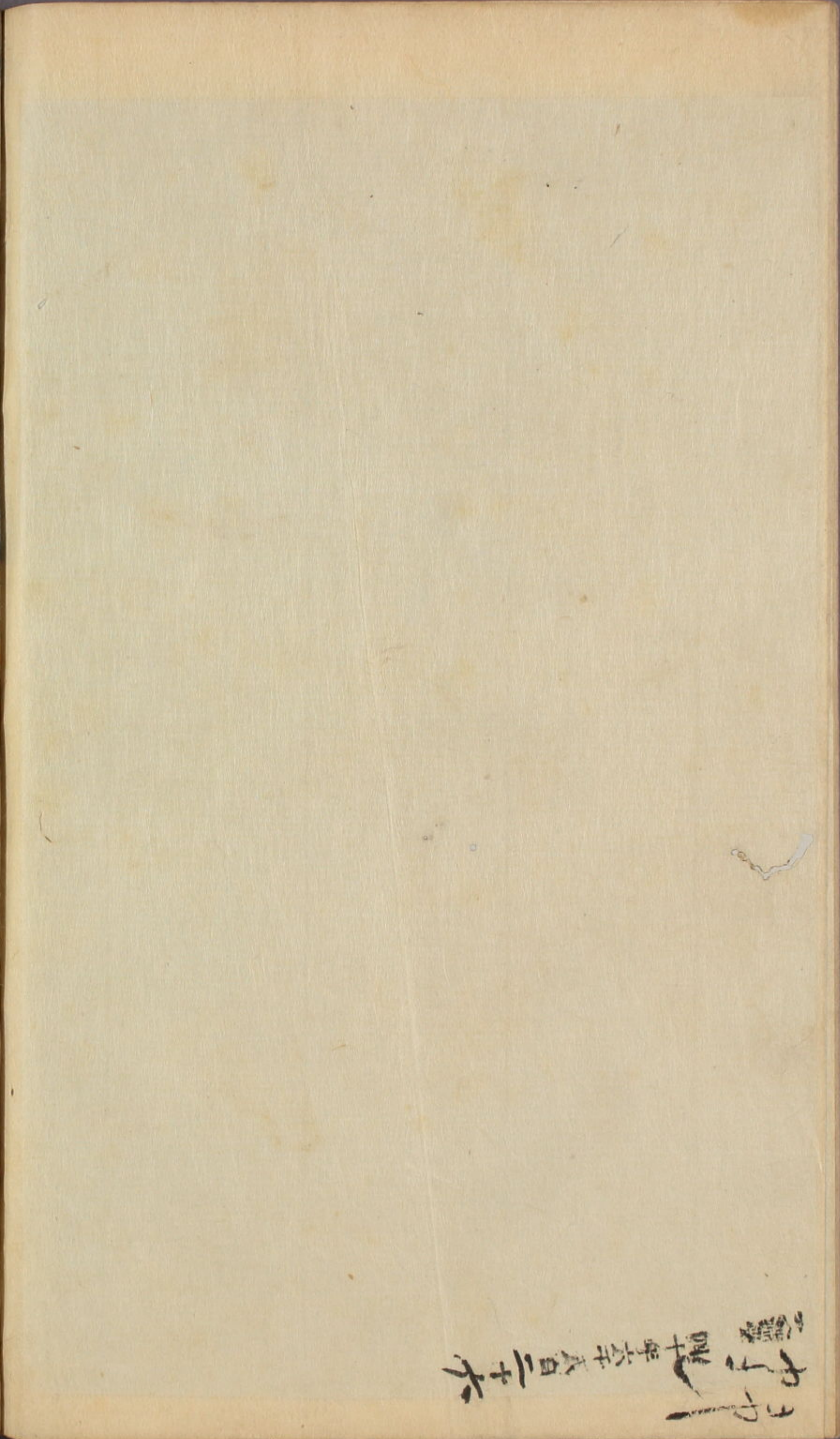
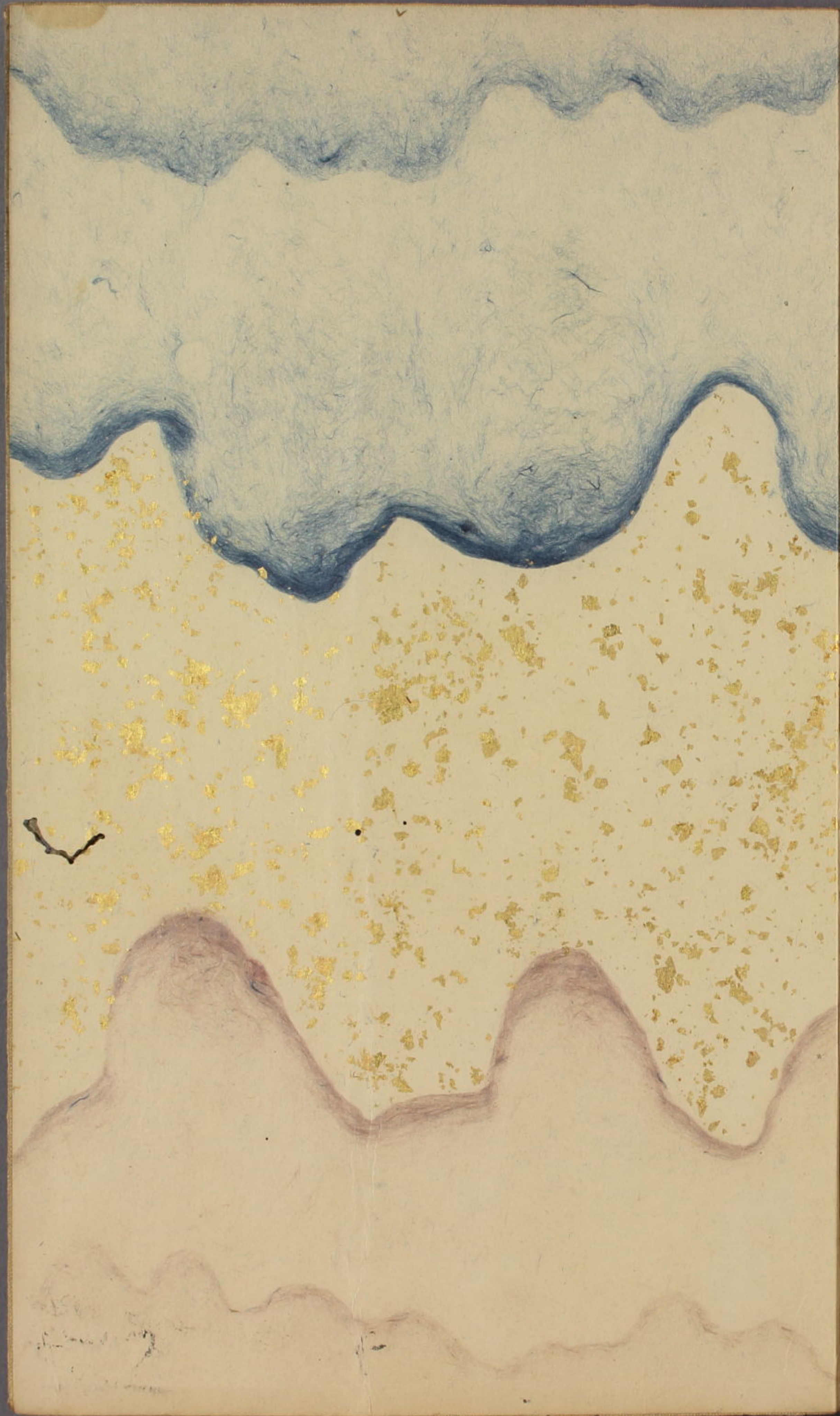
夢庵在判

聽雪同

宗碩同

文龜醉林鐘上禪日

今正記新武是く
後栢原院の御定也此より古の事載法抄之



三
中
十
年
六
月
二
十
六
日

